
魔女

検体番号10032

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女

【Nコード】

N8189Q

【作者名】

検体番号10032

【あらすじ】

とある山の奥地、行つてはならぬ場所がある。立ち入るならば正気を保て、さもなければ・・・“魔女”の毒牙にかかるであろう。

とある山の奥地に小さな集落がある。そこには約20人の男女が住んでおり、裕福とは言えないまでも、平和に暮らしていた。

だが、そんな集落に似つかわしくない、不穏な話を耳にする。

それは、集落から1キロ程行った所にある、山小屋について。

子供が言う。

「絶対に近づいちゃダメなんだって」

男性が言う。

「命が惜しいなら、行ってはいけない」

女性が言う。

「興味本意で行くような場所ではないわ」

そして、集落の長たる老人が、言う。

「もし、目的を持ってあそこへ行くというのなら、気をしっかりと持ちなさい。なにせ、あそこにおけるのは本物の」

魔女、なのだから。

集落からさらに1キロ行くと、その小屋はあった。

全体が統一して木で造られており、一見すればただの山小屋だ。腐敗することはなく、薄汚れた感じも一切ない。しかしその周りには雑草が生い茂り、足を踏み入れれば膝より下が隠れてしまう。

それらはまるで、山がその小屋を隠そうとしているようで。

何でもないはずのただの小屋が、異質な空気を纏い、より不気味さを増していた。

小屋の前には男がいた。年は20代前半で、髪を短く切り揃え、顎には無精髭を生やしている。顔は少しやつれているようだが、小屋を見つめる瞳には、一切の陰りが無い。

彼は集落の人間ではない。わざわざ山に入り、集落で情報を集め、1キロ程の道のりを歩き、ここまで来た。彼は興味本意でこんな山

奥まで来たわけではない。確固たる信念・目的の下、ここに立っている。彼は深く、深く深呼吸をすると、扉の前に立った。そして、ノックなど必要ないと言わんばかりに、両手を振り上げる。

その手には、斧が握られていた。

男はそれを勢いよく振り下ろす。木によって造られていた扉はいつも簡単に砕け、爆音とともにその姿を失う。振り下ろされた斧は勢いそのままに床を傷つけ、砕かれた扉の破片をあたりに散らす。その幾つかは男の足に当たり、痛々しい生傷を作るが、男は気にも留めない。

「……」

男の視線は、自らが開いた空間に釘付けになっていた。そこに広がっていたのは、扉の破片を除いて、普通の光景だった。整理整頓された靴箱に、小物が置かれた棚、さらには客用に入リツパまで用意されている。その一つ一つには埃もなく、清潔さを感じさせた。

男はその光景に、言い知れぬ違和感を覚えた。ただ、男はそれがどういうもので、何に対してなのかは分からなかった。

「あら、随分と手荒いお客様ですわね」

「!？」

男は驚いた。

声をかけられたことではなく、声をかけた存在に。

女性は、まるで初めからそこにいたかのように、唐突に目の前に現れた。

男はまっすぐに家の中を見ていた。瞬きすらしないまま、ただ果然と。しかし、いくら果然としていたとはいえ、話しかけるまで気付かない、などということがあるのだろうか。目の前の女性は、異質。限りなく異質な存在だった。男の頭は混乱し、夢でも見ているかのような気分陥った。無論、そんなことはある筈ないのだが。

「中へいらっしやいな、お茶でも出してさしあげますわ」

女性が口を開くたび、一言一句を口にするたび、男は何かに締め付けられるように感じた。女性が短く言葉を発するだけで、男は全身の汗腺から嫌な液体が分泌されるのが分かった。混乱と動揺、そして異質な空気にさらされた男に、もはやまともな思考など残されておらず、女性の誘いに対して、抵抗など一切なかった。

呼ばれるがまま、誘導されるがまま、奥にある台所へと男は向かう。男の脳は深く考えることをやめ、男から目的意識を奪った。そして女性に続いて廊下を歩き、台所へと足を踏み入れる。

「……っ」

そこで男の脳は、強制的に叩き起こされた。男を襲ったのは、またしても言い知れぬ違和感。

男の目に映るのは、確かに台所だった。山奥にある小屋だというのに、ガスコンロに水道、そして四人掛けのテーブルと、生活するのに事足りる設備は整っていた。お湯でも沸かしているのか、ガスコンロに乗っているやかんからは、蒸気が漏れ始めている。

男は、自分の感じている違和感に気付かない。否、気付けないのだ。男の脳は、それが何なのかを必死に思考するが、答えは見つかりそうもなかった。

「どうかなさいましたか？」

すると、再び女性は男の前に現れた。今度は驚くことも、混乱することもなかった。ただそれは、慣れてしまったわけではなく、感情が働く余裕さえないだけなのだが、男がそんなことに気付く筈もない。

男は落ち着いた様子で、改めて女性を観察する。

腰まで伸ばした黒い髪には癖一つなく、女性の美しさを際立たせていた。化粧はあまりしていないようだが、顔立ちは美しく、妖艶さが滲み出ていた。簡単な部屋着の上に白いエプロンを着たその姿は、一般家庭の主婦となんら遜色ない。先ほど沸かしていた湯で入れたのか、紅茶をカップに入れて手に持っている。

「……ッ！」

男はそこで、気付く。気付いてしまう。この空間の違和感に。

自分は小屋の扉を破壊して家へと踏み入った。だが、この女性の反応はどうだった？

まるで、そうした者が前にもいて、慣れているかのようなだった。

そうやって踏み入った自分に、女性は何と言った？

『あら、随分と手荒いお客様ですわね』

『お客様』

その瞬間、男の脳は覚醒する。そして頭をよぎる、自身の目的。こんな山奥の小屋に、わざわざお茶など飲みに来るわけがない。

男は、眼前の女性を殺すために来たのだ。

男の瞳に決意と殺意が灯る。呆然としていた頭が回転を始め、男本来の理性が戻る。

しかし……

「ようやく、ですか？ 待ちくたびれましたわ」

如何せん、それは遅すぎた。

「っ！！ アッ……グウッ！？」

女性は、その手に持っていた紅茶を男にかけた。飲ませようとしていたとは到底思えないような温度のそれは、男を怯ませるのには

十分だった。

「つくうー!!」

しかし、男とて確固たる信念の下でここにいる。怯んだのはほんの一瞬、その手に持つ斧で反撃をしようとした。

この時、男は失念していた。自分の相手が、何と呼ばれる存在なのかを。

「な……に……?」

男の手に、斧など握られてはいなかった。

台所には、嫌な臭いが充満する。それは、明確な死を実感させる血の臭いだった。

床に横たわる男の頭蓋は割られ、そこからドロドロしたものが流れ続けている。それを見下ろす白いエプロンには男の返り血が大量に付着し、真っ赤に染められている。そして女性の手には、男が持つ

ていた筈の、斧が。

男の感じていた違和感は正しかった。ただ、それを言葉で説明するのは難しい。

あえて言うなら“正常の中の異常、異常の中の正常”といったところだろうか。

最初の違和感は小屋の外観だった。

山の奥地、それも雑草が伸び放題の場所において、小奇麗な小屋など残るだろうか。雑草が伸び放題ということは、外の手入れは行っていないということである。にも拘らず、小屋には汚れが一切なかった。山の奥地という空間において、小奇麗な小屋という“異質な存在。それが、男が最初に感じた違和感の正体だった。

もう一つは、小屋の内装。

一つ一つの家具を綺麗な状態に保ち、客用のスリッパまで常備されていた。“魔女”と忌避されている彼女に、客など来る筈がない。そう、本来なら。

「はぁ……今回の殿方は微妙でしたわね」

女性は憂鬱そうに言葉を漏らす。片足で男の頭をつつき、息絶えた男の表情を見やる。目を見開き、口を半開きにした男の表情から、一瞬で息を引き取ったのだと理解できる。

「まあ、D評価ですわね。理性を取り戻した点は評価しますが、それ以外が最悪でしたもの」

女性は誰に言うでもなく、独り言を淡々と発する。

「全く……“魔女”の前で放心など、言語道断でしょうに……」

そう言って、女性は斧を放り捨てる。

“魔女”とは彼女の忌み名であるだけで、本当に魔法や魔術を扱うだけではない。実際、男に対してやったことだって、単なるトリックなのだ。

男の眼前に不意に現れたのは、人間の“意識・無意識”を利用したものだ。男の意識は、一度目は内装、二度目は台所に対しての違和感にのみ意識が向いていた。女性は、男の意識を一点に集中させることにより、自分への意識を外したのだ。後はただ、男に話しかけるだけ。言ってしまうばこれだけのことだが、実際にやるとなるとかなり難しい。こういった技をすんなりとやってのける辺り、確かに彼女は異質な存在なのかもしれない。

また、男の持っていた斧に関しては、それ以上のテクニックを要する。

男は死の間際、斧を『持っている』と錯覚していた。それが当然、当たり前のことなのだ、と。女性はこの錯覚を、自発的に促した。家の外と内での違和感、不意に目の前に現れたことによる混乱と動揺。これらを男に感じさせることで心の際を作り、男にとっての斧の存在を“意識”から“無意識”に変えた。そうすることで、台所への移動中に斧を盗ることも容易となった。

では何故、彼女はこれらのトリックを用意し、技を極めたのか。

「それにしても……ふふ、今の殿方は、いったい誰の敵討ちに来たのでしょうか。それだけでも聞いておけば良かったですわ」

女性は、復讐を待っている。

だからこそ小屋の外観を綺麗に保ち、少しでも見栄えをよくしようとする。客用のスリッパもそうだ。彼女にとっての復讐者は、『お客様』と同義なのだ。

今の男は、自身の恋人の敵討ちだった。彼の恋人は、兄の敵討ちといって“魔女”の元へ行ったきり、帰ってこなかった。

彼の恋人の兄は、親友の敵討ちだった。その親友は、妹の敵討ちといって“魔女”の元へ行ったきり。

そしてその妹も、“魔女”の元へ。

まさに、復讐の連鎖。

「はあ、最っ高ですわ！ この復讐の連鎖は止まらない、止まる筈がありませんわ。人間とは、それ程までに情が深い生き物ですもの。最初の一人をバラバラにして集落に送ったのは正解でしたわね。噂が噂を呼び、信憑性を高め、“魔女”という存在は確固たるものになりましたわ！ ああ“魔女”……なんと甘美なる響きなのでしょう！！」

49人。それが、“魔女”が殺めた人の数だ。

最初に殺したのは、自分の兄だった。特に理由はなく、ただ、殺した。その時、彼女の体は言いようのない幸福感に包まれた。今までに感じたことのないそれは、彼女を魅了するのには十分だった。

そしてその幸福感に包まれたまま、彼女は自分の兄をバラバラにし、集落へと送りつけた。そこからだろう、連鎖が始まったのは。いつしか集落の外にも連鎖が広がり、連鎖が途切れる気配が一切なくなつた。

彼女には、ただ一つの理想がある。

「それにしても……命を奪うことがこんなにも快感を与えてくれるのなら、命を奪われる瞬間は、如何様な感覚なのでしょう……」

彼女の理想、それは“復讐の牙によって死ぬ”というものだ。

「いつか……そう、いつかそんな時が訪れるのでしょうかね」

その為に、彼女は殺しを続ける。
“魔女”として、あり続ける。

「早くいらっしゃってくださいな。私の、私だけの復讐者。おうじやまそして願わくば」

アナタノ牙デ、私ヲ殺シテ下サイネ

その笑みは深く、どこまでも深く歪んでいたが

他のどんな笑顔よりも美しかった。

（後書き）

はじめまして、検体番号10032です。

この度はご一読いただき、ありがとうございます。

これが初投稿ということになるのですが、いかがでしたでしょうか？
？至らぬ点多々ありますので、ご了承ください。

感想などをいただければ幸いです。どこをどうすればいいのかなど、ご指摘をいただけると参考になりますので、ぜひお願いします。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8189q/>

魔女

2011年10月7日03時45分発行